

戦争体験談(私の富山大空襲)

はんだきょうこ
飯田恭子さん

私が入学した小学校は、総曲輪国民学校 1944 年（昭和 19 年）のことである。それは現在の富山市役所の所にあった木造 2 階建てで、初めて入った大きな建物だった。中を探検しては何度か迷子になった。奉安殿のある講堂に整列させられては、丸坊主になって戦地（どこだったのだろう）へ出征する何人かの先生の壮行会が行われた。中央に奉られている天皇陛下の像(?)は神様で、大小便はしないのだと（勝手に）思い込んでいた。1 年白組の担任は谷村先生だったが、勉強している場面は覚えがない。

私がもっと幼いころに両親が離婚していて、父の実家、すなわち伯父の家、私にはお祖母ちゃんの家で従兄弟たちと育った。その頃、旧制中学教師の父は兵隊にとられていた（後で聞けば、ほとんど病院生活だったようで、人殺しをしなかったことに、かえってほっとしたものだ）。

祖母ちゃんの家は今では名前もなくなっている覚中町で、今、国道 41 号線上とマンションが建っている。一軒おいて西隣はさくらの湯、その店先から横手はちょっと広がっていて、年齢差のある子供たちの遊び場でもあったし、自警団（戦災の際に自分たちで消火、救助などするための訓練をする町ぐるみの会）の集合場所でもあった。

時々、伯母が消火訓練に召集される。丸い輪っかの中に、手渡しされるバケツの水をぶっかける練習だ（これで火事の火が消せるのか、というのは現代っ子の考えること。当時はまだ戦災を知らないから、疑問はない）。

夜は灯火管制で電灯の笠の周囲を黒い布で覆った。外に灯が漏れて敵に気

付かれることがないように、だとか。

たまには、知らない兵隊さんが家に泊まった。ものめずらしくて、私は彼の出かけていく玄関の間にぺたりと座って彼の所作の一部始終を見ていた。軍服に軍帽、下肢にゲートル（これは外国語か？）を巻く、軍靴を履く、敬礼をする、これがお国を守る（って何のこと？）人の形なのか。戦争の何たるかもわからず、漠然と山の中へ鬼退治にでも行くような理解（誤解）の仕方だったろうか。家にある雑誌をめくると、支那人（中国人）や朝鮮人（韓国人）が米国人とともに漫画化されて描かれている。遠い世界のことと感じていた。

たまに総曲輪の食堂に連れて行ってもらった。大丸前の松岡食堂では「雑炊（ぞうすい）」を食べ、小どんぶりの真ん中に箸を立てると間もなく倒れた。水分は多いが米が入っていた。（まだ、戦災前の方が食べ物はあった）

2年生になった頃からは警戒警報のサイレンが鳴る度に、防空ずきん（もめん綿の入った大きな手縫いの帽子）を被って机の下にもぐるか、学校から家に逃げ帰る姿ばかりが思い出される。夏休みに入ると、町中には敵機（米国）の空襲があるかもしれないからと学校側の指示があったためか、友人家族の多くは田舎の知り合いを頼って疎開していたようだ。

父は軍隊から休暇をもらって帰り、私を滑川の知り合いに預けた。しかし、祖母はそこが気に食わないと言って7月中には覚中町に私を連れ帰っていた。そして、毎夜、警戒警報が鳴ると飛び出せるように枕元に非常持ち出しの袋が置かれ、着衣は手際よく着られるように畳んで並べるのが習慣だった。

1945年（昭和20年）8月1日はひと際暑かった。祖母がうちわでいくら扇いでくれても蚊帳の中では汗みどろ。おまけに私は幼くて物を持ってないからと、一張羅のワンピースを3枚も重ね着させられていたからかなわない。

突然、警戒警報！のサイレンが鳴る。手順よく祖母に手を引かれ飛び出す。伯母は戸締りをして、従兄姉と共にやや遅れて追いついた。7歳年上の従姉の礼子は湯屋の空き地で靴のまま長靴を履こうと頑張っていたためという……。行く先は町内で決められたお寺（蓮照寺）の境内に掘られた防空壕。しかし、この時は、敵機は通過し、警戒警報解除。やれやれ命拾い、といった風で家に帰り、皆持ち物を放り出して、また蚊帳に入った。

と、今度は一挙に空襲警報だ！腹の底に響き渡る数知れぬ飛行機の唸り。皆取るものとりあえず逃げ出す。慌ただしさと悲鳴の中、ただ防空壕へと走る。しかし、あたりは B29 爆撃機からぶちまけるように落下する照明弾に照らされて、人々の悲鳴と叫び声をあげて逃げまどう町。次から次へとぶち込まれる焼夷弾で木造の街は火の手が方々にあがる。

防空壕といっても、蓮照寺の境内に手掘りで掘られた穴倉。何人が入っていたらどうか。私は熱くって、恐ろしくってがたがた震えていた。大人たちはここを逃げ出さなくては助からないと口々に叫ぶ。周囲は火の手がついそこまで。そこへ、やってきた自警団団長（今の町内会長）の帽子屋が叫ぶ「逃げるな！！ 逃げるやつは非国民だ！」

その時、逃げたからこそ、私は今、生きている。

逃げる先は東か西か、東方面には不二越工場があり、朝鮮人がいるから危ない（大人のこの意見がどんな理由かさっぱりわからない）、西に行けば神通川があり、その向こうには富山聯隊（兵隊の本拠地）がある。皆一斉に西に走る。兵隊さんが助けてくれるとでも思ったのか、川水があるからと思ったのか？ 庶民にとって、命に係わる事態では、上からの命令が重要か、自分の置かれたところで、自分の身を守る方法を選ぶことが重要か。今に至る

まで私は後者だと信じている。

走っている途中、玄関の戸を開けて浴衣姿のおばさんが眠そうな、けげん
そうな顔をして外を見ていたのをくっきり覚えている。きっと逃げ遅れただ
ろうな、と子供心に思ったものだ。

さて、時は真夜中、2日未明、燃え盛る町中を大人と一緒に逃げ走った挙
句、神通川原に着いた私の目に川を流れて行く塊がいくつも映ったが、それ
が死人であったことはずっと後になって知った。私はどうも眠ったようだ。
石ころだらけの川原に私をうつ伏せにしゃがませ、祖母がその上に四つん這
いになって私を敵機の爆撃から守っていたのだった。弾は上から落ちてくる
はずだったから。ふっと、何か石ころのようなものが左肩に当たったように
感じた。周囲の阿鼻叫喚は遠くに聞こえていた。また、眠りに落ちた。

朝、目が覚めると、川原の方々に家族員の名前を叫んで、泣きながら必死
に家族を探している。我が家は5人とも皆生きていた、よかった。「ん？恭
子の元気がないぜ。」「礼子ちゃん、恭子をおんぶしてやって。」と、おぶ
った礼子ちゃんの肩にべっとり血が！「私でないよ、私なんともないよ。」
と礼子。「恭子だ、恭子の肩から血が出とる！」

それからが家族5人の軍医、病院探しが始まる。

神通川土手の小百合姫伝説の樹のあたりに軍医がいた。私の一張羅の3枚
のワンピースの肩あたりを問答無用とばかりに鋏で切り開く。左肩の傷は大
きくなく、赤チンをつけてから、

神中（神通中学、今の中部高校）へ行けという。町は焼け野原、焼け焦げた
樹木、臭い、死人の匂いだ。そのあたりでは唯一残った神中のコンクリート
製の講堂入口の階段にいた軍医はまた赤チンを塗って、不二越病院へ行けと

いう。負ぶわれた私はいいが、皆焼けるような地熱の瓦礫を踏んで東へ向かった。途中覚中町を通ったが、家は焼け落ち、白壁の土蔵も無残な姿になっていた。ただ、近くの遊び場だった十二銀行の煉瓦壁と石の階段が一部残っていた。あとは大丸（後大和）百貨店が残っただけ。

真っ黒こげになった鉄兜を被った兵隊さんの上半身を見たときには、兵隊さんはお国のために戦いに行った人で、なぜ、私たちと同じような町中で真っ黒こげになったのだろうか？と、強烈な印象をもった。初めて、黒焦げの死んだ人を間近に見たのだ。

清水町あたりからは燃えない家が見られるようになり、当時の砂利道を皆、足を引きずるように歩いた。私はぐったりして従姉の背に負ぶわれたまま。朝から4キロ近い道程をなにも食わずに進んできた皆にとって、秋吉あたりの農家で炊き出しをされていて、黄粉のついたおにぎりをもらった時は地獄で仏、ただ感謝するばかりだった。今でもあの大きな黄粉おにぎりの味が忘れられない。

不二越病院は今の中央病院の場所にあった。病院はいわば野戦病院。病室には目いっぱいベッドが置かれ、入りきれない人は廊下に蓆を敷いて寝かされていた。

血の匂いとうめき声、立て掛けてあった棒によるよろよろとつかまって、もろとも倒れたおじさん、バケツに放り込まれているのはもぎ取られた手や足。茫然と眺めている私がいた。

翌日だったか、レントゲンも撮らずに（！）手術台に載せられた私に、飛んで帰ってきた父はどこから手に入れたのか、「ふくちゃん」の漫画を持って来ていた。

複雑に入り組んだ肩関節に迷入した破片を見つけられず、2回目の手術はレントゲンを撮ってから行われた。執刀は信清先生で、これ以来、長いお付き合いとなった。肩関節に陥入していて、取り出された焼夷弾の端片は2×1,5×1センチ位のずっしり重い錆びた鉄だった。大切にしていたはずだが、何回かの引っ越しで失ってしまった。上腕骨の骨頭が完全に損傷していたため、骨の成長点を失い、その後骨が伸びることはなくなり、上肢の左右差が大きくなった。そして、腕は上に挙がらないまま。

まだ、抗生物質などない時代だったから、当然ながら化膿した。時は真夏。鼻先にある肩の膿の匂いが耐えられない。父は、別れた妻に化粧用のおしろいをもらってきて、私の鼻下にはたいてくれた。

看病していた祖母がある時、排せつ介助に使う新聞紙に天皇陛下の写真があるのを横にやって別のを使った。あれが、後になってみれば、8月15日終戦の日の報道だったのだろうと推察している。ラジオもテレビもない中で病室だけが私の世界だった。

病院内にはしばしば号泣する親族の声が響いた。横のベッドにいるおねえさんに滋賀県からご両親がかけつけた。「やすこ、やすこ、目開いてみい、やすこ！」と関西弁で何度叫んでも娘さんは目を開かなかった。父はその後、時々この台詞を真似て、お前は生きていてよかったと言い、疎開先から連れ帰った祖母に預けざるを得なかった忸怩たる思いを語った。

祖母は祖母で、どの孫より私を可愛がってくれた。母親の味を知らず、片輪（かたわ）になったのは自分のせいだと自分を責めつづけるのを、私は何でもないよ、というような顔をして過ごしてきた。

伯母たちは、足でなくてよかった、と慰めるつもりで言うのだった。

私にしてみれば、弾の破片が入った場所が数センチ違って、顔、首、心臓であつたらとか、祖母ちゃんの頭、体でなくてよかったとさえ思ってきた。しかし、歳を重ねて今、体のあちこちの左右差や不自由がこの手の左右差に基づいていることに気付いている。

さて、退院は秋だったか、冬だったか思い出ないが、帰った先は下新川郡熊野の小倉さんちだった。従姉の礼子が小型の黒ずんだノートに友人の教科書を写し取ってくれたものを使った。田舎の学校にはほんの数か月通っただけで、学習の記憶がない。2年生を通過しただけだった。

覚中町の焼け跡に伯父が小さなバラック建ての家を建てた。井戸は戦前のまま使えた。水は澄んで冷たかった。夏には家庭菜園でできたスイカやトマトが冷やされた。東隣の北さんちの玄関戸は蓆（むしろ）でできており、ぶら下げられた一枚を撥ね上げて出入りをするものだった。皆貧しかった。

総曲輪小学校は不二越の女子寮の和室に短期間、間借りして、細い机に正座して授業が始まっていた。時々、飛行機の暴音がすると、思わず皆外に飛び出して空を見上げた。もう、弾は落ちてこない安心感があった。この学校から団体で初めて町の映画館へ行ったが、その題名は「食うか食われるか」海中の魚の話だったように思う。その後何年生の時か忘れたが、モイラシャラー主演の「赤い靴」は、バレリーナーになりたいな—という医者以外の私の将来の夢になった。左腕が挙上しないという客観的事実に気付いていない、全身を映す鏡などない時代の少女の夢だった。

病院へは数か月に一度ほど通って、肩の傷を診てもらっていた。肉芽が上がってくるとあの美男子の信清先生が鉋でそれを切り取るのだ、麻酔もせずに…。痛いなのなの。帰り道、父はよく我慢したとほめて、総曲輪の西洋軒

で洋食（オムライス？）をご馳走してくれた。

間もなく、総曲輪小学校は富山城の南側、今の ANA クラウンホテルのある場所に木造で新築され、移転した（だが私が 5 年生の時火事で焼失、また移転したが）。

家庭では誰もが空き地に家庭菜園をしていた。肥料は下肥（糞尿）だったので、寄生虫にたかられていた。回虫や十二指腸虫に栄養を奪われて、青白い貧血のような痩せた少女たちだった。学校で、駆虫のために海人草を飲まされて、周りが黄色に染まった。シラミ退治のために頭髪や下着に DDT を撒かれてはいたが、毎朝、痒みで目覚め、毛布や下着のノミ、シラミつぶしが日課だった。この体験が後のち保健所勤務で役に立つことになろうとは（海外から持ち込まれた頭シラミや卵を見たこともない職員ばかりだったので）。

概して、小学生時代は虚弱児に近かったので、父は滋養のある食べ物といって、卵や牛乳、小魚をせっせと探してきては食べさせてくれたし、部屋の隅で本を読む私に、日中は太陽に当たって遊べと口うるさく言った。

芝園中学 1 年生の時、まだ大学を卒業したての体育担当の若林景子先生がなにを思ったのか、私に体操ダンスクラブに入部するようにすすめた。

特に得意な科目もなく、読書（と後には映画観賞）の好きな目立たない少女は言われるまま体操ダンスを始めた。平均台や跳び箱はできたが、側転すると左肩がどうかなるんじゃないかと心配でできなかった。

しかし、両手長さの差、腕が上に挙がらない、後ろに回らない傷害をそれほど卑下していなかったのは、全身を映す鏡がなかったおかげだろうが、なによりも、それをあげつらっていじめる同級生がいなかったことだ。そして、若林先生はそんな私を友人と共に舞台にあげて踊らせ、県体にまで出場させ

た。それは、自分に自信のなかった私にとって、負傷して以来の漠然と医師になりたいという夢を現実の目標とする自信につながった。

日本を決して戦争をしない国に、そして、わたしは弱い立場にいる人の側に立つこと、を生きる目標にしようと決めた。

私が受けた富山空襲は、日本本土の受けた数十か所の空襲の中で、一平方単位当たりの爆弾の多さは東京に次ぐものだったという。が、一発といえど広島、長崎の原子爆弾の爆破、加害力は広がりだけでなく、次世代にまで及ぶ。また、一夜だけの爆撃でなく、沖縄、ベトナムなどでは何か月何年に及んだ。幼い頃は空からアメリカ兵にやられたという思いが強かったが、歳を経て知った日本の中国や東南アジアへの侵略、地上戦の数々…いまにいたるまで、地球上でどれだけの罪のない市民を殺し合ってきたことか。戦場は私達の生活の場なのだ。国が戦争に負けても勝っても市民が殺されること、一生消えぬ心身の傷を負うことに変わりはない。国が戦争をしかけようと目論むとき、あらゆる科学、文化、芸術を一つのその方向に向け、制度や法律で縛り、市民の声を出させないように監視の目をはりめぐらせた。戦争の火種はどんな小さなことでも理由になることを歴史で知った。どんな理由があろうとも、戦争という集団人殺し手段を使わない決意を市民一人ひとりが心の底に持つことが、いま大切なのだと言いたい。